



2021.06.02 全校一斉読書感想の巻  
身延中学校 としよだより

5月28日、今年度初めての一斉読書が行われました。  
1冊の本に向き合うという実にシンプルな50分間ですが、その中で「笑い」「憧れ」「驚き」「怒り」「発見」「納得」「共感」「希望」「疑似体験」など、一人一人がさまざまなドラマを感じてくれたように思います。素敵な感想がたくさん集まりましたので一部を紹介します。

# 3年



# 1年

## 101人が選ぶ「とっておきの言葉」

(河出書房新社)

この本には題名の通り色々なことばがのっていました。ぼくが1番心に残ったのは「何も咲かない寒い日は、下へ下へと根をのばせ。やがて大きな花が咲く」ということばです。ぼくは何か失敗するとすぐ落ち込んでしまうけれど、これは根を伸ばしている最中なんだろうと思うと少し楽になった気がしました。「失敗も自分の栄養に変える」と考えると花が満開になるまでがとても楽しみになってきました。

(1A Sさんの感想から)



# 2年

## 「あの星が降る丘で君とまた出会いたい」

汐見 夏衛/著 (スターツ出版文庫)

『あの花が咲く丘で君とまた出会えたら』を読みその続編で気になっていました。『あの花…』で出会った百合と彰は70年前の日本では…。お互いを想っていても結ばれずに終わった2人。今回『あのて源として百合と出会って。運命の強さを感じました。大切な人の生まれ変わりに恋されてうれしい反面、つらそうだなとも思いました。

(2A Aさんの感想から)



## 「小説版 はたらく細胞」

時海 結似 (講談社)

身体の中、赤血球などがどういう動きをしているのかがよく分かった。少し絵も入っていてさらに分かった。インフルエンザなどの細菌が身体に及ぼす影響なども詳しくのっていた。「体温調節システムが敗北しようと、無意味な努力になろうと、おれが仕事を投げ出す理由にはならん」という白血球のことばが心に残った。イラストがとてもかっこよかったり、かわいかったりして最高だった

(3A Mさんの感想から)



## 「また必ず会おう」と誰もが言った

喜多川 泰 (サンマーク出版)

出会う人、一人ひとりが主人公に対して違うアドバイスをしていてすごいなと思った。またその一つひとつが心にささるものばかりだったので読み甲斐があった。人生は決まっていな。自分で探し、自分で作りだす。これが人生の楽しさなんだと、この本を読んで感じた。そして人生は「経験づくし」だとも感じた。

(3B Sさんの感想から)



## 「キャン・ユー・スピーク甲州弁？」

五緒川 津平太 (樹上の家出版)

去年のビブリオバトルで紹介されていたので読みました。この本を読んで思ったことは、単純に「驚」です。僕のお父さんは甲府生まれです。普段使っていることばが、実は甲州弁だったとこの本を見て知りました。「ちゃきー」「ささらほうさら」「背中かじって」「いいさよー」「ちょびちょび」「やせたい」などを日頃から使っています。

兄は東京で仕事をしているときに、甲州弁が自然に出てきてしまい、大変だったそうです。

(2B Sさんの感想から)



## 「長浜高校 水族館部！」

令文 ヒロ子 (講談社)

水族館部は本の設定で、本当はない部活だと思っていたけれど、愛媛県立長浜高等学校にあると初めて知りました。私は「担当の生き物の世話をするのも好きだけど、世話をしている生き物をお客さんに見て喜んでもらえるのは本当に楽しい」という文が心に残りました。自分が頑張って育てたものを他の人がほめてくれる、楽しんでくれるのはうれしいし、達成感があるので同感できました。私も水族館部に入りたいと思いました。(1B Mさんの感想から)



### 次回の一斉読書は6月25日(金)です。